殺され屋

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺され屋

【Ｎコード】
Ｎ９９３０Ｔ

【作者名】
うわの空

【あらすじ】
「１回一万円。金さえ払ってくれれば、あとは好きなように殺してくれていいよ。思う存分、俺を殺してくれ。それが、殺され屋だから」

0

「はあっはあっはっ…」
狭い個室の中で、男の呼吸する音だけがやたらと大きく響いていた。男は金属バットを構えているが、それは明らかに震えている。バットには少量、血が付着していた。
「大丈夫だって言ってるのに」
額から血を流している少年が、それを見ながら笑う。癖のある黒髪に、黒い瞳。身長はかなり低く、男の腰くらいまでしかない。どこからどう見ても『少年』だった。
「だけどおまえ…これ以上やったらやっぱりさ…」
びくびくしながら、男が声を出す。息が荒いのは運動したからではなく、興奮しているからだろう。
「普通の人なら、もうこれで死んでるかもよ」
自分の額を指さしながら、少年はあざけるように笑う。その額はぱっくりと割れて、血が吹き出ていた。傷口の割れ目から少しだけ、白いものが覗いている。
「骨もちょっとイっちゃってるし」
少年がけらけらと笑うと、男の顔が真っ青になった。バットの震えが先ほどよりも大きくなる。爪先までがくがく震えている男を見て、少年はため息をついた。
「あんたが辞めたいなら、辞めてくれてもいけど。それだと料金に釣り合ってないかもよ？一発で１万円なんて、高いだろ」
「だけどよお…」
男が何か言おうとすると、少年はポケットから折り畳み式のナイフを取り出した。それを見て、男の顔が歪む。
「…あんたを刺したりしないよ」
少年は苦笑しながらそう言うと、自分の胸にナイフを突き刺した。
「！！」

そこは、心臓のある場所、のはずだった。

少年のシャツに広がっていく、赤黒いシミ。そのシミと、少年の顔を交互に見ている男を見ながら、少年はにんやりと笑った。

それはまるで、人間ではないような顔で。

「だからさ、さっきから言ってるじゃん」

胸にナイフを刺したまま、おどけるような口調で続ける。

「俺は、殺されても死なないって」

1

殺したい相手がいる場合、まず考えるのは殺し方だろう。それから、時間。そして場所。

時間は夜がいいと思ってる。なんとなく、だけど。場所は正直言ってどこでもいい。問題は殺し方だ。これが全然決まらない。

私は、芳しい香りの湯気を立てているコーヒーを一口飲んだ。…やっぱりこの喫茶店のコーヒーはおいしい。

駅の近くにあるこの喫茶店は、時代に取り残された隠れ家のようだった。ゆったりとした音楽が流れる店内はまるで時間が止まっているみたいで、店そのものがアンティークのようにさえ感じられる。私はこの喫茶店をかなり気に入っていた。利用客が少なくて静かだから、というのもこの喫茶店を贔屓（ひいき）している理由の一つだったりする。マスターには悪いけれど。

そんなことを考えていたら、私の目の前にクッキーを盛った皿がコトンと置かれた。

「え？」

頼んでません、と言いながらマスターの方を見ると、白いひげを生やした年配のマスターはにっこりと笑った。

「何だか先ほどから、思いつめてらっしゃるような顔をされていたので。それはサービスですよ」

マスターのこういうところが好きなのだ。私はマスターにお礼を言うと、クッキーをかじった。口に含んだ瞬間広がるバターの香りと、ホロホロと崩れて溶けるような独特の食感。このクッキーはもちろん商品で、しかもマスターの手作りだ。そしてコーヒーと同様、かなりおいしい。

私はコーヒーをもう一口飲んでから、殺し方についてあれこれ考えていた。その時だった。

カランカラン。

ベルの鳴る音が店に響いた。それはドアが開いた合図で、

「あーあ。疲れた」

そんなことを言いながら、小さな男の子が店の中に入ってきた。

私は眼を丸くして、男の子の方をじろじろと見た。癖のある黒髪に、真っ黒な瞳。日に当たることを忘れているような、白い肌。身長はかなり低くて、１４０ｃｍくらい。Ｙシャツに黒のハーフパンツを合わせている。どこかの制服？…小学生、だろうか。

はっきり言って、この喫茶店から浮き出ている感じがして仕方がない。それは多分、彼が子供だから。そしてこの喫茶店が、大人の雰囲気を醸し出しているから。

「お疲れさま」

マスターがその子に対してにっこりと笑う。彼はポケットから無造作に１万円札を３枚取り出して、カウンターに置いた。そしてぶっきらぼうに、

「今日の」

「…ああ」

マスターはその１万円札を受け取ると、エプロンのポケットの中へ入れた。

「今日の仕事は疲れた。もう寝るから」

彼はそう言うと、さっさと外へ出て行った。

「…お孫さん、ですか？」

何となく気になって、マスターに尋ねた。マスターは困ったように笑うと、白いひげをさすりながら「まあ、そんなところです」と言った。いつもよりもはっきりしない喋り方だった。

あんな小さな子が言っていた「仕事」ってなんだろう。そう思ったけれど、困ったように笑っているマスターには訊けなかった。

2

一番簡単なのは、毒。だけど問題は、毒なんてそう簡単に手には入らないということだ。市販薬なんて毒の代わりにはならない。毒の代わりにしようと思ったら大量に飲ませる必要があり、それはどう考えてもスマートなやり方じゃない。第一、ターゲットと接触のない私が、ターゲットの食事に何かを混入するのは難しい。

次に手頃なのは刃物かなあと思う。手頃というか、非力な私でも使える凶器だ。だけど刃物で人を殺そうと思ったら、どこを刺せばいいんだろうか。適当なところを刺しても死なない気がする。刃物でやる場合は、首を狙うのがいいのかな。

大学の図書館でそんなことを考えていたら、すっかり日が暮れてしまった。私は駅に向かって歩きながら、「縄を使う場合ならどの程度の太さがいいのか」について考えた。頭の中は、殺し方でいっぱいだった。そんな時

「…？」

駅に向かう大通りの横にある、狭い路地。そこに見えた、ライトアップされている立て看板。その看板に書かれた文字。私は一度立ち止まって、何かの間違いだと思いながらもう一度、目を細めてその看板を見た。

その看板には手書きらしい字で堂々と、こう書かれていた。

『殺され屋』

「…は？」

思わず間抜けな声を出す。なに？殺され屋って。

近づかない方がいい。本能はそう告げているのに私はそれを無視して、その看板の立っているビルの方へと近づいた。

立て看板の立っている場所まで来ると、下りの階段が見えた。どうやら「殺され屋」は地下にある店らしい。
「…居酒屋の名前、かなあ？」
うん、きっとそう。私は自分を納得させて、その場を離れようとした。その時だった。
「あれ？お客さん？」
階段を上ってきた誰かが、私に向かって声をかけた。
その相手を見て、私はぎょっとした。

この前喫茶店で見た、小学生くらいの男の子だった。

「悪いけど今日はもう店じまいだよ。来たいのなら、明日来てくれる？」
彼は看板を手際よく片づけながら、無表情で言った。私はそんな彼の後ろ姿を見ながら
「…ねえ、なんなの？その『殺され屋』って」
問いかけると、彼がこちらを振り返った。それから私の顔をまじまじと見て、ふいに笑った。
「ああ、あんたどっかで見たことあると思ったら。爺さんのとこの常連じゃん」
爺さんのとこ、とはおそらくあの喫茶店のことだ。私の顔を覚えていたらしい。私は内心ぞっとしつつも、彼が私の質問に答えてくれるのを待った。
「殺され屋って言ったら、殺され屋だよ」
彼は笑いながら言った。看板を器用に折りたたむと、両腕で持ち上げる。看板は結構大きくて、小さな体には酷く重そうだった。
「手伝おうか？」
私が思わずそう言うと、彼はきっとこちらを睨んだ。
「いいよ。慣れてるから」
そう言いながら、階段を下りて行く。ところが数段下りたところ

で、ふいに足を止めてこちらに顔をむけてきた。それから不気味な笑顔で、こう言った。
「あんたさ、殺したいやつでもいるの？」
その質問にも、そう言った彼の顔にも、ぞっとした。だけど私はなるべく冷静なふりをしながら、静かに言った。
「いるわ」
「…へえ」
彼はにんやりと笑うと、
「ちょっと、ついてきなよ」
「え？」
「殺され屋が何なのか、教えてあげる」
そう言って、私を待たずに地下へと降りて行った。

3

階段を下り、錆びついたような色のドアを開けると、そこには茶色いシミの目立つ白い壁と床だけが広がっていた。広い部屋には、デスクも窓もない。…いや、地下だから窓がないのは仕方ないんだけど。

「…？」

私は一歩踏み出そうとして、ドアのすぐそばに置かれていた箱につまずいて転びかけた。

「あ、足元気をつけて」

明らかに警告が遅い。私は何にぶつかったのかと足元を確認して、顔が真っ青になったのを自覚した。

金属バット。ナイフ。縄。ハンマー。電動のこぎり。その他もろもろ。箱の中は、明らかに『物騒なもの』の部類に入る代物でいっぱいだった。

「そこで好きな道具選んで、こっちに来なよ」

彼はにやにやと笑いながら、部屋の隅に看板を立てかけた。私は一瞬逡巡してから、鞘に入っている少し大きめのナイフを選び出すと彼のもとに向かった。

「…ダガーか。お姉さんもいい趣味してるね」

私の持ちだしたナイフを見て、彼が不気味な笑顔を浮かべる。

「ダガー？」

「そのナイフのこと」

私の持っているナイフを指さしてから、彼は笑顔のままでため息をついた。それから息を吸い込むと、

「1回、一万円」

無表情に、無感情に、そう言った。

「え？」

「金さえ払ってくれれば、後は好きに殺してくれていい。そのナイ

フで刺してくれてもいいし、他の道具に持ちかえてもいい。なんなら素手で、絞め殺してくれてもいいよ」
「…は？」
「殺したいやつがいるんだろ」
彼はそういうと、自分の顔を指さして言った。
「俺のことをそいつだと思って、心ゆくまで殺してくれ」
「…何言ってるの？」
冗談言わないでよ、と言おうとしていたはずの私の声はひどく震えていた。それは、こんな小さな子に冗談を言われた怒りではなく、単純な恐怖で。

彼の真っ黒な瞳は、真っ暗な眼は、本気だと言っていたから。

彼はふっと笑うと、私の眼を見た。笑っても、眼の中の闇は消えない。
「誰かの代わりに殺される。それが、殺され屋」
彼はそう言ってから、顔の位置に両手をあげておどけてみせた。まるで、ピエロみたいに。
「だけど残念ながら、俺は死なないから。だから安心して殺してくれていいよ」

その時私の頭は完全にフリーズしていて、目の前の少年が言っていることに、全くついていけてなかった。
殺す？1回一万円？殺す？死なない？
ボーっと立ち尽くす私を見て、彼はまたもやため息をついた。
「お姉さん、やる気あんの？」
「だって…」
もはや何を言っていいのかすら分からず、
「そしたらあなたが死んじゃうじゃない」

我ながらよく分からないことを口走った。手に持っているナイフが震える。これで、あの子を殺せって？
「だーかーらー」
彼は呆れた口調で、ゆっくりと言った。
「俺は死なないって言ってるじゃん」
彼はそういうと、すたすたと私のもとに近づいてきた。思わず身構える私に、彼は呆れたように笑う。
「ビビってんの？あんたを殺したりなんてしないよ。それ貸して」
そう言いながら指差されたナイフを、私はおずおずと彼に渡す。彼は何のためらいもなく鞘からナイフを抜くと、
「ちょっ…！」
私が止めるよりも早く、そしてあっさりと、自分の胸にナイフを突き刺した。

白いシャツに、赤黒いシミが広がっていく。彼はそんなのは気にもしない様子で、真っ青になっている私の方を見ながら笑った。
「なんなら首も切ろうか？」
そう言われて、ほとんど反射的に首を振る。
「きゅ…」
救急車と言おうとすると、彼がまたもやあっさりと、自分の身体からナイフを引き抜いた。銀のナイフにべったりと付着した、粘着性のある液体。私はそれを見て、ぺたんと尻もちをついた。恐怖で全身が震えていた。
彼は自分がナイフを突き刺した場所に手を当てた。みるみるうちに手が赤く染まっていく。だけど１０秒もたたないうちに、彼は手を離した。そして、血に染まったシャツをめくり上げる。
「…！？」
ナイフを刺したその場所には血がべったりと付いているのに、ナイフを刺した傷跡が見当たらなかった。
「治った」

彼はにやりと笑うと自分のシャツを見おろして、血の付いていない部分でナイフの刃を丁寧に拭き、鞘に戻した。そしてそのナイフを、こちらに向かって放り投げた。
からんからん、という乾いた音が私の足もとに、そして部屋に響く。
「これで分かった？」
彼は赤黒い服を着たまま、笑った。
「俺は死なないんだよ。どうやってもね。バラバラにされたこともあるけど、それでもちゃんとくっつくから。ま、バラバラにされると回復するまで半日くらいかかるんだけどねえ」
「あ、あなた…なんなの？」
先ほどから自分の言っていることがおかしい。知ってはいたけど、そう訊くしかなかった。だって私の言っていること以上に、目の前で起こっていることの方がおかしい。彼はまるで、人間じゃないみたいで。まるで彼は、彼は。
「俺はアクマ」
彼は眼を細めて笑った。何かを、あざけ笑うかのように。
「俺はアクマ。だから、死なないんだよ」

4

あの日どうやって家に帰ったのか自分でも覚えていない。それから一週間、私は彼のことで頭がいっぱいだった。大学なんてどうでもよくて、それよりも通学途中にある例の喫茶店に入るか入らないかの方が重要だった。

きっとあのマスターは、何かを知っている。彼の、何かを。

私が意を決して喫茶店を訪れたのは、『あの日』から1週間以上経ったあとだった。

「いらっしゃいませ」

「…いつもの、ください」

いつものように優しい笑顔のマスターに向かって、小さな声で注文する。店内に他のお客さんがいないのを確認して、私はカウンターに腰かけた。マスターがコーヒーを淹れる様子を、そわそわしながら眺める。いざとなると、何から話しはじめたらいいのか分からない。

「お待たせしました」

良い香りのする、いつものコーヒー。マスターはその横に、シフォンケーキののった皿をゆっくりと置いた。マスターお手製のシフォンケーキには、程よく泡立てた生クリームがたっぷりと添えられている。

「え？」

頼んでません、と言おうとすると、マスターがふんわりと笑った。

「お話が長くなりそうですから。サービスです」

そう言うとマスターは玄関へと向かい、『営業中』と書かれたプレートをひっくり返して『準備中』にした。

「彼のこと、でしょう」
マスターは自分もコーヒーをすすりながら、ゆっくりとした口調で言った。私は浅く頷く。何故か口の中が苦くなって、シフォンケーキをつついた。シフォンケーキは口の中であっという間に溶けて、甘さだけが舌に残る。
「この前言っていたんですよ。『あんたんとこの常連さんが俺の店に遊びに来たよ』と。特徴を聞いたら、あなたのようでしたから」
「…マスターは、あの子とはどういう関係なんですか？」
マスターの目を見ながら、出来る限り落ち着いた口調で尋ねる。マスターは少しだけ首をひねると
「ううん…。信じていただけないかもしれませんが、彼と私は小学生の時、同級生だったんですよ」
「え！？」
飲みかけのコーヒーをうっかりこぼしそうになり、私はあわててカップをソーサーに戻す。そして、マスターの顔を見る。白髪が混ざっている頭髪、皺、たるんだ皮膚。マスターはどう見ても、６０過ぎのように見える。対する彼は、どう見たって小学生だ。なのに、
「同級生？」
マスターの言葉を確認するように私が繰り返すと、マスターはゆっくりと頷いた。
「だけど彼は…」
「どう見ても小学生、でしょう。私も再会した時は驚きましたよ。どういうことなのかは私も詳しく知りません。ですが、彼は確かに私の同級生です」
マスターははっきりとそう言うと、少しぬるくなったコーヒーに口を付けて一息ついてから、続けた。
「私が彼に声をかけた時、彼は驚いたような、懐かしいような、…そして泣きそうな顔をしていました。そして言ったんです。

俺はアクマになったんだ。だから年もとらないし、死ぬこともないんだと」

5

私はコーヒーにミルクと砂糖を入れてかき混ぜた。そして、一口飲む。いつもよりも苦い気がするのはきっと、コーヒーのせいではない。マスターは喉が渇いているのか、空になったカップにおかわりを淹れると、ゆっくりと話し始めた。

「彼は昔は…本当に普通の子供でしたよ。活発で、よく笑う子でした。私は彼と、いろんないたずらをして遊びました。もちろんその頃は不老不死なんてことはなかった。彼は確かに成長していました。私は幼稚園から小学5年生のころまでずっと、彼と一緒にいたから間違いないはずです。…私の目の前からいなくなってしまうまでは、彼は普通の人間だった」

その言葉を聞いて、私はカップから目をあげてマスターの方を見上げた。どこか懐かしそうな顔をしているマスターは、だけど影が目立っていた。

「いなくなった、というのは？」

私が言うと、今度はマスターが私の方を見た。一瞬、アクマの底なしのように真っ黒な瞳を思い出してぞっとする。しょぼしょぼと瞬きをしたマスターの眼は、影こそあるものの、暗い瞳ではなかった。

「彼の家が、火事になったのです」

マスターはその眼に悲しみの色を添えて、そう言った。

「家は全焼。焼け焦げた家の中から、3人の遺体が発見されました。彼の両親、それから妹の遺体です」

「…彼は」

「助かったんですよ。彼だけは火事の前に、家から逃げ出していた」

そう言うと、マスターはうつむいた。

「彼はずっと、自分のことを責めていました。俺が3人を助けてい

たら、と。近所に住んでいた親戚の家に引き取られてからもずっと、彼は嘆き続けていました。そしてある日を境に、彼は忽然と姿を消した」

私のカップを見たマスターに、「おかわりはいかがですか」と言われて、私は自分のカップが空になっていることにようやく気付いた。「お願いします」と返すとマスターはうなずいて、空になったカップに湯気の立つ温かいコーヒーを注いでくれた。

「それからずっと、彼は行方不明のままでした。彼の親戚が捜索願を出したのもむなしく、彼は見つからないまま、月日だけが流れていきました。

…彼が自殺したのではないか、という噂まで流れましたよ」

「だけど、彼は生きていた…」

「そう」

マスターは苦い顔で笑った。

「あれはもう今から２０年ほど前ですね。私が４０歳のころです。私は仕事の都合でこの土地を訪れたんですが、その時、彼にそっくりな子供を見つけたんです」

マスターは遠いところを見ながら、何かを思い出して笑った。

「思わず、その名を呼びましたよ。彼はこちらを振り返って、一瞬怪訝そうな顔をしました。私が自分の名前を告げると、驚いたような、懐かしいような…泣き出しそうな顔をしました」

「…やはりその子供は、あなたの同級生の彼、だったんですね」

「そうです」

マスターは遠いところ見たままだった。

「何があったのかは知りません。だけど彼は、年をとらなくなってしまった。そして、死ななくなった」

そこまで言うとマスターは言葉を切って、窓の外を見た。私もマスターにつられて、外を見る。先ほどまで快晴だったはずなのに、空はすっかり黒くなり、大粒の雨が降っていた。

「夕立、でしょうか。傘は持っていますか？」
「…いいえ」
「すぐにやむといいんですが…」
不規則な雨音が、店内を包み込んだ。

6

「今は、彼と一緒に住んでらっしゃるんですか？」
私がふいに聞くと、マスターは難しい顔をして笑った。
「一緒に住む…というのは違いますね。彼はほとんど、地下のあの部屋で過ごしていますよ。…あなたも行ったでしょう？あの店」
「…殺され屋、ですよね」
「そうです。本当は私も彼と一緒に住もうと思って、提案したんですよ。『私は自宅を改造して喫茶店を経営するから、君も一緒に住まないか』と。彼はそれを聞いて、かなり渋っていました。それからしばらくして、言ってきたんです。『お前の名義を貸してくれないか』とね」
「…それで、あなたの名義で借りたあの場所を使って、彼は仕事を始めた？」
「ええ。そして、テナント料と称して、その日の売り上げを毎日私のところに持ってくるんです。ですから彼とは毎日顔を合わせていますが、…それだけです」
そこまで話し終わると、マスターはため息をついた。
「私が知ってるのは、ここまでなんですよ。彼はそれ以外のことは何も教えてくれません」
「…。」
私はぬるくなったコーヒーを飲みながら、彼の声を思い出していた。

『俺はアクマ。だから、死なないんだよ』

「…彼はどうして、殺され屋なんて仕事をしているんでしょうか」
1週間ずっと考えていたことを、声に出した。死なないから、殺され屋をやる。理にかなっていると言えるのかもしれない。だけど

やはり、おかしい。
生きるためにお金を稼ぎたいから。ならともかく、彼は不死身なのだ。
「申し訳ない。私にもよく分からないんですよ」
マスターはあごひげをこすりながら、すまなさそうな声を出した。
その時

カランカラン

準備中にしたはずのドアが、開く音がした。私はドアの方を振り返る。小さくて細い、黒い影。そこに立っていたのは、ずぶ濡れになった彼だった。
「…あれ？準備中かと思ったら…。密会中だった？悪かったね」
私たちの方を見て彼は肩をすくめると、ポケットからくしゃくしゃになった1万円札を取り出した。
「今日はこれだけ」
カウンターにそれを置くと、彼は私の方を見上げた。濡れそぼった前髪からぽたぽたと水滴が落ちて、床に小さな水たまりを作っている。彼は私の顔を確認すると、マスターの方を睨むように見た。
「じいさん。あんた、昔話でもしたのかい？」
黙ってコーヒーをするマスターを見て、彼は「はっ！」と笑った。
「別にいいけどね。いまさら何言ってくれても」
投げやりにそう言うと、もう一度私の顔を確認するように見た。
「気が向いたら、また店に来てよ。いつでも殺されてやるからさ」
彼の不気味な笑顔は、もしかしたら営業スマイルなのかもしれない。私は彼に向かって笑おうとしたが、見事にひきつった顔を彼に向けてしまった。

「…外はまだ雨が降ってるのか？」
マスターが彼に白いタオルを渡しながら、尋ねる。彼はそれを受け取ろうともせず
「降ってるよ。見て分からない？土砂降り」
そう言って笑った。私は窓の外に目を向ける。雨のせいで景色が真っ白に見える。それくらいの土砂降りだった。
マスターのタオルを受け取ろうとしないのを見かねて、私は自分のポケットからハンカチを取り出し、彼の顔を拭こうとした。だけど
「やめろ」
そう言われて手を止めた。彼は濡れた顔で、こちらを睨んでいる。怒り。…悲しみ？彼の感情を、私はうまく読み取れない。
少しだけ。そう、ほんの少しだけ似てるんだ、彼は。私の弟に。

7

「…傘を貸してやるから、駅まで彼女を送ってやってくれないか」
マスターがそう言うと、彼は露骨に嫌そうな顔をした。
「…なんで俺が」
「私は足が悪い。いいだろう？駅はすぐそこだ」
マスターはそう言うと、透明のビニール傘を取り出した。彼はそれを明らかに嫌そうな顔で受け取る。
私は何も言わない。あえて、何も言わない。

コーヒー代を払おうとすると、マスターが首を振った。
「今日のはサービスですよ。また遊びに来てください」
そう言って、私から彼の方へと視線を落とした。

身長差から考えても、私が傘を持つ方が自然だ。私は彼から傘を受け取ると、自分と彼ができるだけ濡れないように注意しながら傘をさして歩いた。酷い雨のせいで、足元はすぐにグチャグチャになった。
「あんただけ濡れないようにしなよ。どうせ俺は濡れてんだからさ」
彼はそう言ったけれど、私はできるだけ彼が濡れないように注意する。これ以上、濡れさせたくなかった。
「…あんた、いくつ？」
ふいに聞かれて、私は一瞬自分の年齢をど忘れした。１８、と言いそうになってから
「…１９」
最小限の単語で、自分の年齢を教える。自分から訊いてきたくせに、彼は興味なさそうに「ふうん」とだけ返してきた。
「あなたの名前は？」

今度は私が尋ねた。彼はこちらを見上げて、
「アクマ」
「それがあなたの名前？」
「そうだよ」
マスターに彼の本当の名前を聞き忘れた事を後悔した。マスターならきっと、彼の本名を知っているはずなのに。
「…なんで自分のことを、悪魔だなんて言うの」
気付けば責めるような口調で、私は彼に問いただしていた。彼はうんざりと言わんばかりの顔をこちらに向けて、それから苦笑した。
「年をとらない。死なない。…そんな俺は、天使に見えるかい？」
彼はいびつな笑顔を作った。それを見て私が黙り込むと、彼はふっと無表情になった。
「いいこと教えてやろうか。あの爺さんも知らないことだ」
「…？」
彼は無表情のまま、続けた。
「俺はね、人を殺したことがある。両親と、妹。しかも2回殺した」
私は眉をひそめる。驚愕、よりも疑問。
「…2回殺したって、どういうこと？」
私がなるべく小さな声で言うと、彼はこちらを見上げた。その眼はやはり、底なしのように暗い。
「そのままだよ。1回殺して、もう1回殺した」
彼はそう言うと、歪んだ笑顔をこちらに向けた。
「そんな俺を、アクマ以外になんて呼べばいい？」
私は何も、答えられなかった。

8

悲哀。驚愕。逃避。憤怒。憎悪。…正当化。そしてまた悲哀へと戻るこのループを、私は何度廻っただろうか。馬鹿みたいに何度も何度も。いや、馬鹿なんだ。だからいつまでたっても抜けられない。

薄暗い弟の部屋に、音をたてないようにそっと入ってドアを閉める。その部屋にある物はすべて、弟が死んだあともその場から動くことなく、持ち主の帰りを待ち続けている。私は足音をたてないようにベッドに向かうと、ゆっくりと腰を下ろした。ベッドが軋む音が一瞬だけ響いてから、その部屋は静寂を取り戻す。

部屋に電気は点けないまま、私は弟の部屋を見渡す。剥がれかけているＳＬのポスター。大切にしていた船の模型。傷だらけの黒いランドセル。汚れている制服。見える光景は、いつだって変わらない。

ベッドに腰掛けて考え事をしている弟を、何度か見たことがあった。あの時の弟の気持ちを理解してあげたくて、私はいつも真似をする。そして嗤う。何もかもが、もう遅いのだ。弟はもう死んでしまっている。いまさら理解したって、理解しようとしたって意味がない。それにきっと私には、弟の気持ちを理解してあげることはできない。

頬を伝う生ぬるい何か。耐えきれなくて、嗚咽が漏れる。うまく息ができなくなる。膝を抱える格好で、泣く。

これをあと何回繰り返せば、私は抜け出す事が出来るのだろうか。

「秋瀬姉ちゃん」
控えめな声を出しながら悟が私の部屋に入ってきたのは、ちょうど梅雨の時期だった。その日は静かな雨がしとしとと降っていて、気だるいような湿気の強い空気が全身を包んでいた。
「なあに？」
私は問題集から目を上げもせずに、後ろにいるはずの悟に向かって返事をする。当時の私は受験生で、志望校に入るために毎日勉強をしていた。悟はそれを知っているからこそ、申し訳なさそうに部屋に入ってきたのだと思う。

7つ年の離れた弟は、私にとっては大切な存在だった。両親が共働きなのもあって、弟は私を頼ってくることが多かった。弟が優しい性格だからなのか、それとも年が離れているせいか、喧嘩をしたことは一度もない。
後ろにいるはずの弟がなかなか話を切りださないので、私は問題を解く手を止めて後ろを振り返った。同い年の男子たちよりも背の小さな悟は、椅子に座っている私とほぼ同じ目の高さだった。うつむいているせいか、少し癖のある黒髪がはっきりと見える。
「…悟？」
顔を覗き込むように見ると、悟の右頬が腫れているのが見えた。
「どうしたの、それ」
「…転んだだけ」
明らかに震えている声が、それは嘘だと言っている。いじめ、という言葉が私の脳裏をよぎった。
「誰かにやられたの？」
「転んだだけだって」
頬に触れようとする私の手から逃げるように、悟は首を振った。
それからおもむろにポケットに手を突っ込むと、ピンク色の小さな包みを取り出した。
「これ…」

「？」
「お姉ちゃん今日、誕生日でしょう？」
そう言われて、私は壁にかかっているカレンダーを確認した。確かに今日は私の誕生日だ。すっかり忘れてた。
「おめでとう」
悟が少しだけ顔をあげて、ほほ笑んだ。
「…ありがと」
プレゼントを受け取って、ほほ笑み返す。本人が転んだだけだと言ってる以上、余計な詮索はしない方がいいんだろうか。私はプレゼントを机の上に置くと、立ち上がった。
「頬、冷やそうか。保冷剤取ってくるね」
そう言いながら部屋を出て行こうとする私の服を、悟は軽く引っ張った。
「…なに？」
なるべく優しい声で、訊く。
「あ…」
悟は眼を伏せたまま、動かない。少ししてから、蚊の鳴くような細い声で
「中学校ってさ、楽しい？」
と訊いてきた。…その質問の意味を、意図を、私は深めに解釈する。
「楽しいよ。友達たくさんできるしね」
出来る限り明るい声で、笑顔で、言った。それを聞いた悟が、顔をあげて笑う。
「そう、だよね…。ありがとう」
腫れた右頬が、痛々しかった。

例えばあのとき私が、無理やりにでも真実を聞きだして、そしてそれに立ち向かっていたなら。未来を待つのではなくて、現在(いま)を変

えることを教えてあげられたら。手伝ってやれたら。そしたら、未来を変えることはできたんだろうか。

2週間後に、悟が首を吊ることはなかったんだろうか。

葬式に参列した学校関係者は、誰一人泣かなかった。校長も、担任も、生徒たちも。泣き続ける両親に、校長たちは必死になって「学校には責任がない、いじめはなかった」と繰り返した。私はそんな声を無視して、参列している悟の同級生たちを睨むように見ていた。

この中に、悟を殺した奴がいる。

11歳。法的に裁かれることもなく、直接手を下したわけでもない。悟は自殺した。だけどこれは、間接的な殺人だ。悟を追い詰めた人間が、この中にいるのだ。

…許さない。

悟の葬儀から数日後、私は近所に住んでいる悟の同級生を呼び出して、話を聞いた。内気なその子はおどおどしながらも、教室で何が起こっていたのかを語ってくれた。

悟が皆の前で服を脱がされたこと。殴られたり蹴られたりしていたこと。教科書を紛失していたこと。お金を取られていたこと。担任は恐らく気付いていたはずだが、何も言わなかったこと。

「僕も…見て見ぬふりしてたんです。いじめられるのが、怖くて」
そう言い終わると、その子は泣きはじめた。
「…そっか、分かった。ありがとうね」
私はその子の背中をさすりながら、悟をいじめていたグループと、その中心人物の名前を聞きだした。
それから毎日、悟の部屋で一人で泣きながら、そいつらを殺す方法をあれこれ考え続けた。

自分が殺人者になることに、特に抵抗はなかった。

9

「…なんだ、あんたまた来てたのか」
喫茶店に入ってくるなり、アクマは面倒くさそうな声を出した。
「悪い？」
「いや」
私が睨むと、アクマはマスターの方を見ながら笑った。
「よかったなあ、爺さん。常連客ができて」
そう言うと、いつものように一万円札をカウンターに置いた。今日は４枚だった。
「じゃあな」
「ちょっと待って」
そのまま出て行こうとするアクマをひきとめたのは、私だった。
「なに」
「…コーヒーでも飲んでいったら？」
「要らねえよ」
アクマはそのまま手をひらひらと振りながら、店を出て行った。

「…失敗しちゃった」
私は苦笑いして、自分のコーヒーを飲んだ。
「何か話したいことでもあったんですか」
マスターが不思議そうな顔でこちらを見る。私はカップをソーサーに戻すと、「うーん」と唸った。
「なんだかちょっと気になって。彼、私の弟と少し似てるところがあるような…」
「ほお…」
「あ、いや。弟はあんなふうにひねくれてなかったんですけど」
私が笑うと、マスターもつられて笑った。
「まあ彼はなんだかんだ言って、もう６０歳を超えてますからね」

「そうですね」
そう言いながら、私は彼のことを思い出していた。
何かを隠している暗い瞳。その色は悟の瞳と、よく似ていた。

「…追いかけたらどうですか」
マスターに言われて、私は顔をあげた。マスターは壁にかかっている時計を確認すると、
「もう店じまいしているでしょうけど、あの中にいますよ」
そう言って笑った。私はしばらく考えてから、マスターにお礼を言った。鞄から財布を取り出すと、コーヒー代よりも多い金額をカウンターに置いた。
「ここのクッキーって、包んでもらえたりしますか？」
それを聞いて、マスターは嬉しそうに頷いた。

10

「燃やしてもいいんですか？」
そう言ってきた客は久しぶりだったので、俺は思わず笑った。
「悪いけど、それだけはできないんだよね。火災報知機が反応しちゃうから」
天井を指さしながら返事をすると、結局その客は電動のこぎりを持ち出した。どちらにしてもかなり残虐なやり方だ。よっぽど誰かのことを怨んでいるんだろうか。そんなことを考えながら、俺はされるがままに切り刻まれた。自分の肉片が壁に飛び散るのを見ながら、遠い昔のことを思い出していた。

父の机からこっそりくすねたマッチは、当時の俺の宝物だった。子供にとって、何で火遊びはあんなにも魅力的なんだろうか。駄目だと言われると、余計にやりたくなる。俺はその日、夜中に一人でこっそりと火遊びをしていた。暗闇の中で燃える赤い炎が、やたらと綺麗に見えた。

例えばその時、俺がマッチをくすねていなかったら。火遊びをしていなかったら。家の中でそれをしていなかったら。未来は変わっていたのだろうか。

畳に燃え移った炎は、あっという間に燃え広がっていった。その光景を見た俺は焦って、小さなバケツに水を汲むのをひたすら繰り返した。怒られるのが怖かったのと、自分で消せるだろうという楽観。あの時もっと早く事態の深刻さに気付いて、2階で眠っている両親と妹を起こしにいっていたら。

…どれもこれもいまさら、だ。

どんどん広がる炎はついに、家を飲みこんだ。俺は一人で家の外に逃げ出して、その様子を茫然と眺めた。近所の野次馬たちの声。消防車の音。漏れ聞こえる、隊員の声。

「中にいる人はもう…」

…俺が、殺したんだ。

親戚に引き取られてから、俺は毎晩家を抜け出して、人気のない空き地で一人で泣き続けた。俺が殺した。俺が殺した。それだけが頭にあった。

その時だった。

『…失った家族を、取り戻したいか』

声が、聞こえたのは。

「え…？」

俺はあたりを見回した。だが、誰もいない。

『家族を甦らせたいか』

先ほどよりもはっきりと、腹に響くような低い声が頭の中に聞こえた。俺は見回すのをやめて、宙を見ながら頷いた。

『ならば、お前の命を賭けろ』

その声はさらに低い声で、俺に話しかけた。

『お前の命と引き換えに、家族を甦らせてやる。私には、その力がある』
「あんた、誰だ？」
俺が震える声でそういうと、その声の主は言った。
『悪魔、だ』
笑っているような、声だった。

「…俺の命と引き換えに、家族を甦らせてくれるんだな？」
『ああ』
悪魔の姿は見えない。だけど俺は、その言葉を信じた。
「分かった。俺の命をあげるから、家族を皆甦らせて」
『契約、完了だな』
その声と同時に、俺の身体が強く光った。眩しすぎて、眼を開けていられない。
ああ、きっと俺は死ぬんだ。だけど皆が生き返れば、それでいい。

俺の意識は、ゆっくりと遠のいていった。

11

死んだ、と思っていた俺は眼が覚めたことに驚いた。起き上がり、自分の身体をまじまじと見る。特に変わった様子はない。

「…生きてる、のか？」

そう呟いた時だった。

「う…うぁ…ぁ…」

隣から呻くような声が聞こえて、俺はそちらにゆっくりと目を向けた。何故か、見てはいけないと思った。

そこにあったのは、黒こげの『モノ』だった。

「…え…？」

ソレから漂う異臭で吐きそうになっている俺の頭に、低い声が響く。

『お前の家族だ』

「そんな…話が違うじゃないか！！」

俺は焼けただれている家族を見るのに耐えきれず、眼をそらした。声の主はその様子を見ているのか、愉快そうに続ける。

『誰も、健康な状態で甦らせてやるとは言っていない。死ぬ直前の状態で甦らせたら、そうなっただけのことだ』

ガラガラに枯れたような声で呻いている物体の方へ、俺はもう一度眼をやった。黒く焼けただれた肉。皮膚が所々が裂けていて、赤黒い肉がはっきりと見える。瞼がなくなり、露出している眼球。

「…ぁあ……ぅ」

3人の苦しそうな声を聞いていられなくて、俺は耳をふさいだ。

『お前が望んだことだ』

耳をふさいでいるはずなのに、その声だけははっきりと聞こえた。

『お前の命は頂いた。お前ももう、死人だ』

それを聞いて、眼を見開く。耳をふさいだまま、俺は反論した。
「けど、俺は生きてる…！」
『生ける屍』
その声は、笑っていた。
『お前の命は確かに、もうその身体にはない。お前は死んでいるのだ』
「何言って…」
『もはや死んでいるお前は、もう死ぬことはない。成長することも、ない』
悪魔は少しだけ、その声を高くした。
『これでお前も、悪魔の仲間入りだ』
そして、声は聞こえなくなった。

俺は、家族であるはずのモノに目を向けた。
苦しそうに呻く声。焼けただれた赤黒い身体。

「……ぐ……しぃ…」

妹の声を聞いて、俺は立ち上がった。生ぬるい液体が頬を伝う感覚。俺はそれを服の袖で乱暴に拭うと、大きな石を両手で持ち上げた。そして、まずは妹に近づく。

くるしい。妹は確かに、そう言ったのだ。

「…ごめん」
小さな声とともに、妹の頭を石で砕いた。

家族を殺すのは、これで2回目だった。

一刻も早く「それ」が終わるように、何度も何度も石を振り下ろした。
何かが砕ける音。何かが飛び散る音。
聞こえなくなる、呻き声。

「ははは…」
気付けば、一人で笑っていた。

俺は、アクマ、だ。

12

細い路地に入って例のビルに近づく。立て看板は立っていなかったけれど、私はためらわずに店へと向かう階段を下りた。相変わらず錆びたような色のドアを、ノックしてみる。返事をしてもらえないんじゃなかろうか、と思っていたら

「はい？」

ドアを開けて、アクマがひょこっと顔を出した。それから私の顔を見て

「は？」

露骨に面倒くさそうな顔をする。そんな彼を見て、私は笑った。

「お客様じゃなくて悪かったわね」

そう言うと、彼はため息をついた。ドアにもたれかかって、こちらを見上げる。

「なんの用？」

「んー。とくに用事はないんだけど」

それを聞くやいなや、彼はさらに面倒くさそうな顔をした。

「…ちょっと話したいの。だめ？」

「面倒」

顔に書いてあることをそのまま音声にされて、私は苦笑する。彼は私の方を見て、もう一度ため息をついた。それから

「勝手にすれば？」

そう言って、部屋の奥へと入っていった。勝手にしろと言われたので、勝手にする。私は彼に続いて、勝手に部屋へと入った。玄関のすぐ横に置いてある箱につまずかないように注意しながら。

彼は何もない床にぺたんと座っていた。本を読んでいるわけでも、音楽を聞いているわけでもない。白い壁と白い床の中で、彼の姿だけがくっきりと浮かび上がって見えた。

「本当にここ、何もないね」
私がそう言いながら近づくと、彼は鼻で笑った。
「ナイフとかハンマーとかならあるけど？」
「そういうのじゃなくてさ…」
私は苦笑しながら、彼の隣に腰掛ける。ひんやりと冷たく硬い床は、彼のことをそのまま表しているような気がした。

私は自分の鞄を開くと、
「じゃんじゃじゃーんっ！」
と、少しだけ豪華っぽく聞こえる効果音を言いながら、包んでもらったクッキーを取り出した。
「…なにそれ」
「クッキーよ」
「それは見りゃわかる」
彼は呆れた口調でそう言いながら、私の持っているクッキーを見つめた。
「爺さんとこのクッキーだろ？んなもん、喫茶店で食って来いよ」
「一緒に食べようと思って」
私がそう言うと、彼は下を向いた。何度目か分からない、ため息の音。
「俺は別に、食べなくても死なないんだよ」
「そんなの知ってるわよ。逆に言うと、これを食べたって死なないでしょ？」
彼はこちらを見上げる。うんざりしているようにも見えるし、困惑しているようにも見える。私はそれに構わず、クッキーの包みを開いた。途端に、バターの香りが広がる。
「食べたことないんでしょ？マスターのクッキー」
「…ああ」
「食べてみなよ、おいしいから」

沈黙が続く。彼が食べようとしないので、私は先に一枚つまんだ。それから、
「あ、コーヒーもあるから」
そう言って水筒を取り出した。クッキーだけだと喉が乾くでしょうと言って、マスターが水筒にコーヒーをいれてくれたのだ。彼は水筒を見ると、目線を逸らした。
「あれ、もしかしてコーヒー飲めない？」
「そういうわけじゃない」
彼は目線をそらしたまま、呟く。
「…なんでこんなことするんだ？」
それを聞いて、私も彼から目を逸らす。自分が今やっていることが単なるエゴであると、自分自身で知っていたから。
「諦めてほしくないから」
小さな声で、クッキーの方を見ながら呟く。膝を抱えて座りなおした。悟の部屋で、泣く時みたいに。
「あなたが死ななくても、年を取らなくても。自分を諦めないでほしいから」

誰もいないみたいに、部屋の中が静かになった。彼も私も何も言わない。私は白い壁を見つめた。彼がいつも一人で、見ていたであろうその光景を。
そこにはやっぱり、何もなかった。
「５０年」
沈黙を破ったのは、彼の方だった。あざけるような口調で、彼は続ける。
「５０年、年もとらずに生き続ける。死んでるはずなのに、生き続ける。…どんな気持ちだと思う？」
その声の中にわずかに含まれた、怒り。
「周りは皆年をとっていく。死んでいく。だけど自分はずっとこの

ままだ。何をしたって死なない。同じ姿で世界の上に乗っかったまま、だけど世界から置いてかれる。…お前には、分からない」
私は身体を小さくした。瞬きすると、涙が一粒零れおちた。それには気付かないふりをする。
「人と関わりたくないんだよ」
吐き捨てるような彼の声が、わずかに震える。
「関わったって、どうせそいつも俺を置いて死んでいく。だからもう、俺は人と関わりたくない。人間らしい生活もしたくない。幸せもいらない。ただ、もう終わりにしたいんだ。
…それでもお前は、諦めるなって？」
知ってた。私は彼と悟を重ねて、何かを変えようとした。悟の時は変えられなかった未来を、変えようとした。
それが単なるエゴだってことは、言われなくても知ってた。
「…あなたは」
声が震えて、涙がこぼれる。彼は決して私の方を見ようとはしない。私も、彼の方を見れない。足元を見たまま、彼に向かって声を絞り出す。
「死にたいから、殺され屋をやってるの？」
誰かがいつか、自分を殺すことを夢見て。

13

刺された時の鋭い痛み。身体を切断された時の熱。殴打された時の鈍痛。それらを我慢するのはとても簡単だった。傷口がふさがるのも、あっという間。

だけどいつまでたっても慣れないこの痛みは、いつまでたっても治らない。治せない。その痛みは常に自分のそばにあって、何かがある度にその存在を訴える。

「…帰れよ」

俺は彼女の顔を見ずに、吐き捨てた。

「もう帰れ。…お前は2度と、ここには来るな」

彼女が一瞬、こちらを振り向く気配がした。けれど、無視する。

早く出て行ってくれ。頼む、から。

彼女はフラフラと立ち上がると、

「ごめん」

消え入りそうな声でそう言って、部屋から出ていった。残ったのは甘い匂いのするクッキーと、温かい水筒。

「…。」

クッキーを一つ、手に取ってみる。

何も考えない。何も感じない。そういう、フリ。

準備中、と書かれたドアをためらわずに引いた。

カランカラン

頭上で鳴ったベルの音を聞いて、爺さんがこちらを見た。俺の顔を見て一瞬眼を見開いてから、寂しそうな顔をする。

「…一人か？」

そう俺に尋ねてくる爺さんの声は無視して、コーヒーが入ったままの水筒をカウンターに乱暴に置く。その音は必要以上に大きくて、爺さんの身体が少しだけ震えた。

「余計なことすんな」

睨みながらそう言うと、爺さんもこちらを見てくる。その眼には、悲しみの色がくっきりと見えた。

踵を返してドアへと向かうと、かすれた声が後ろから聞こえてきた。

「タクマ」

「…懐かしい名前で呼ぶんじゃねえよ」

昔、何度も呼ばれたその名前は、もう俺の名前じゃない。俺がタクマのままだったら、今頃俺も、爺さんになってるはずだった。

俺はもう、タクマじゃない。

「お前があの仕事をやってるのは、…誰かが誰かを殺すのを止めるためか？」

爺さんの、低くてしゃがれた声。５０年前のこいつの声は、もっと高くて。

「誰かの殺意を消化するために。…お前は行方不明になる前、よく言っていたな。自分は人殺しだと。…そういう思いを他の人にはさせたくなくて、だから殺され屋をやってる。違うか？」

こいつと俺は、同じくらいの身長で。

「…そう思うならそれでいいよ」

俺もこいつも、爺さんになるなんて、想像すらしてなかった。

俺は爺さんにならなかった。こいつは爺さんになった。

時間が歪んでるのは、俺の方だ。

14

嘲笑にも聞こえる、耳障りな笑い声。私はその声の主を、遠くから眺める。背負っているランドセルは、乱暴に扱っているのか傷だらけだった。

それでも悟のランドセルほど、ボロボロのランドセルを背負っている子はいない。

髪の毛を茶色に染めたその男子は、何が楽しいのかへらへらと笑っている。恐らくもう、悟のことなんて覚えていない。自分が悟に何をしたのかも。何をさせたのかも。

あいつはこのまま、へらへら笑って生きていくんだ。人殺しの、くせに。

楽しそうに歩くその男子を見ながら、私は心の中で吐き捨てる。

お前が悟を追い詰めたんだ。お前が悟を殺したんだ。

そうやって、自分を正当化する。

私じゃない。

悟を追い詰めたのは、悟を殺したのは、私じゃ、ない。

ナイフを買った。少し大きな刃のそれは、彼の店にあったナイフを彷彿させた。

復讐。これもきっと、私のエゴでしかない。

自殺するその日までほほ笑んでいた悟はきっと、こんなことを望

んではいない。あの子は、怒ることがひどく苦手だった。だからきっとあの茶髪の少年に対しても、…私に対しても、怒ってなんかいないんだろう。

怒っているのは私なんだ。復讐したいのは、私。

自分の部屋でナイフを見ながら、彼のことを思い出す。もしも私がナイフを使ったなら、しばらくはあの喫茶店にも、…彼のいる白い部屋にも行けなくなるだろう。

「お前は2度と、ここには来るな」

彼の言葉を反芻する。それと同時に後悔した。自分勝手な感情を彼に押し付けようとしたことを。

彼に、一人ぼっちになってほしくなかった。一人ぼっちにしたくなかった。だけどそんなの、彼にとってはいい迷惑だ。

窓から差し込む朝日を反射してキラキラ光るナイフは、いつもより余計に鋭利に見える。私はそれをそっと、鞘におさめた。

…謝りたい、と思う。仲直りができなくても、せめて謝っておかないと。…次に会えるのは、いつになるか分からないから。

悟が誕生日プレゼントにくれた小さな犬のマスコットは、私の机の上で静かに笑っている。私はそれに気付かないふりをして、ナイフを鞄に入れて外に出た。

15

『殺され屋』と書かれた立て看板の前を、私はうろうろしていた。2度と来るな、と言われたその場所。喫茶店にも行きづらくて、だけど彼に一言謝っておきたくて、私はどうしようかと悩み続けていた。30分くらい、その場でうろうろしていた気がする。

彼が店から出てきたのは、本当に偶然だった。彼は階段を半分上ったところで足を止めて、こちらを睨みつけた。その眼に、少しだけひるむ。

「…来るなって言ったはずだけど」

怒りの感情をのせた声で、彼が言ってくる。私はナイフの入っている鞄を握りしめて、大きく息を吸った。

「だけど、謝っておきたかったから。…あの時は、ごめんなさい」

私の言葉を聞きながら、彼が眉をひそめた。それから、私の顔と鞄を交互に見ると

「…店の中に入って」

それだけ言って、踵を返して階段を下りはじめた。

「え？」

「早く」

彼に言われるがまま、私も階段を下りる。

私が部屋に入ったのを確認すると、彼はドアの鍵を閉めた。そして部屋の中央へ向かって歩くと、ドアの前で佇んでいる私の方を振り返った。そして、はっきりとした口調で言う。

「誰を殺す気？」

そう言われて、私の顔が熱くなった。なんで？なんでバレたんだろう。

「その大事そうに抱えてる鞄さ、中になに入ってんの？」
思わず、鞄を強く抱きしめる。中にはナイフが入っています、とは言いたくなかった。彼は私の様子を見て、ため息をついた。
「仕事柄さ、分かるんだよね。人を殺そうとしている人間の眼って、ナイフみたいにぎらぎらしてる。自分で気付かなかった？…あんた今、そういう眼してるよ」
言い終わるとふっと息を吐くように笑って、私の顔を見上げた。

「殺す理由は？」
「…復讐」
正直に答えると、彼は面倒くさそうに頭をかいた。
「なるほど。で、そいつを殺したら自分も死ぬ気？」
「…！」
まるで私の頭の中を読んでいるみたいに、彼はすらすらと言葉を吐きだす。何も言わない、何も言えないのは、ある意味肯定してしまったようなものだ。彼は私の方をちらりと見てから、薄く笑った。
「誰かを殺して、あんたも死んで？それで物語が綺麗にまとまるとでも思ってんのなら、あんたは相当の馬鹿だね。…そっからまた、新しい話が始まるんだよ。悲哀や憎悪がごちゃごちゃに混ざった物語がね。俺は今まで、そういうのをいくつも見てきた」
黙り続ける私を見て、彼はまたぼりぼりと頭をかいた。それから
「鞄の中の物、出して」
私の眼を見ながら、言った。

「それで、俺を殺してみなよ」

挑発的な口調で、彼が言う。私は鞄を強く握りしめたまま、動けない。
「金は取らない。俺をその相手だと思って、殺してみなよ。…まあ、俺は死なないけどさ」

自虐するように鼻で笑うと、彼はこちらを見つめたまま黙り込んだ。

沈黙が続く。私は堪え切れなくなって、鞄の中から鞘におさまったナイフを取り出した。それを見て彼が笑う。

「あんた、本当にナイフが好きだね」

それを聞いて、私も少しだけ笑う。おそらく、ものすごく歪んだ笑顔で。

「ここ」

彼は自分の胸をトントンと指さしながら言った。

「ここに心臓がある。あんたのそのナイフなら多分、届くよ」

彼の言葉を聞いて、自分の手の中のナイフを見た。手は、まだ震えてはいなかった。

16

私は大きく息を吸って吐くと、彼の方を見た。
「もしも、あなたが死んでしまったら？」
私の質問に彼は眼を丸くして、それから笑った。
「その時は、人助けしたと思ってくれていい。…いや、人じゃないけど」
「…。」
質問こそしたものの、私は迷っていた。私が殺したいのは茶髪のあの少年であって、いま目の前にいる彼ではない。彼が死なないのは知ってる。だけど、殺したくなかった。

私が渋っているのを見かねて、彼がこちらに近づいてきた。相変わらず、顔には歪んだ笑顔を張り付けたまま。
彼は私の目の前まで来ると、背伸びをして私の手の中にあるナイフから鞘を抜きとった。鞘を床に落とすと、そのままもう一度自分の胸をトントンと指さす。
「ここだ。間違えんなよ。…首でもいいけど」
そう言って、眼を閉じた。
「っ…」
途端に、手が震えだす。
…たとえば今、目の前いにいるのがアクマじゃなくて、あの茶髪の少年だったら。私は躊躇わずにこのナイフを突き刺す事が出来るんだろうか。

笑う悟の顔。その死に顔。責任はないと繰り返す教師の声。嘲笑のような茶髪の少年の笑い声。楽しそうな笑顔。ボロボロになった

悟のランドセル。汚れた制服。
ほほ笑み続ける、マスコット人形。

「…できない」
私が声を漏らしたのと、涙がこぼれたのは同時だった。目の前の彼はゆっくりと目を開けると、ほほ笑んだ。
「俺はもう死んでるけど、あんたが殺そうとしてるやつはまだ生きてる。あんたはきっと、そいつのことも殺せない。今みたいにな。…やめといた方がいい」
「あなたも生きてるじゃない」
「俺は死んでるんだよ」
「だけど、生きてる」
私はナイフを持っていない手で、彼の頬に軽く触れた。そこには確かに、体温が、あった。
「…あんたは、あんな思いしなくていい」
彼は私のナイフを見ながら呟いた。
「あんな感情、知らなくていい。この店よりも、そのナイフよりも、あんたにはあの喫茶店とコーヒーの方が似合ってる」
彼は私を見上げて、ほほ笑んだ。その笑顔は、歪んでいなかった。
私はナイフを持ったまま、声をあげて泣いた。

私は、復讐を果たせなかった。果たさなかった。
彼は、私を止めてくれた。

私は、彼に何もできなかった。

17

いつもの喫茶店で、いつものコーヒーを飲む。相変わらず客は少ない。今日は自ら注文したココアクッキーを、私は一つつまんだ。
「彼は今頃、どこにいるかな」
何度目かは分からないセリフを、マスターが呟く。私はそれを聞きながら、わざと甘めにしたコーヒーを飲んだ。

私のことを止めてくれたあの日の夜、彼はこの街からいなくなった。

2日連続で喫茶店に訪れないのを不審に思ったマスターが彼の店に向かうと、そこにはもう彼の姿はなかった。玄関の横に置かれていた、大きな箱も。
小さなメモ用紙が部屋の中央に置かれていて、そこには
『いままでありがとう。もう帰ってこない』
と書かれていたそうだ。

「死んではいないでしょうけど」
マスターはそう言って、ため息をついた。私もつられて、ため息をつく。私はあの日のお礼をまだ、言っていなかった。
「…彼はどうして、私のことを助けてくれたんでしょうね」
私が小さな声で呟くように言うと、マスターが目を細めた。
「あなたが、彼のことを助けようとしたからでしょう」
私はクッキーに目を落とす。『助けようとした』と『助けた』は違う。私は結局、彼に何もしてあげられなかったのに。

「彼は…そういう子でしたよ。昔から」
私が考えてることを見透かしているように、マスターは笑った。
その笑顔に、少しだけ寂しさを宿しながら。

私の机の上には、あの時のナイフ。そしてその横には、いつまでもほほ笑み続けるマスコット人形が座っている。

「…いまいちだな」
少年は一人ごちた。湿気ているようなその食感はわざとではなく、本当に湿気ているのだと思う。妙に脂っぽいことも含め、その商品はいまいちだった。
「値段は関係ないんだな。…これ、高かったのに」
一人で文句を言いながらゴミを片づけていると、目の前の扉がゆっくりと開いた。眼鏡をかけた肥満体型の若い男が、おどおどしながら入ってくる。
「あの…なんか、噂を聞いたんだけど。ここって…」
若者の言葉を聞いて、少年はほほ笑んだ。
「殺され屋だよ。あんた、お客さん？」
男は慌てて、こくこくと何度も頷いた。気の弱そうなやつだなあと思いながら、
「そこにある箱の中から好きなもの持ってきて。で、好きなように殺してくれていいよ。…あ、料金先払いね」
少年がそう言うと男はわたわたと財布を取り出し、震える手で一万円札を差し出してきた。受け取って、ポケットに突っ込む。
「あ、あんた…。本当に、不死身なのか？」
額に脂汗を浮かべながら、男が尋ねてくる。少年はそれを見て笑った。
「アクマだからね」

もう死んでいるから、とは言わなかった。

あれこれ物騒な物の入った箱を覗きこんでる男を見ながら、思いついたように尋ねる。

「なあ、あんたさ。クッキーのおいしい店知らない？」

「へ？」

不意を突かれた男が、間抜けな声で返事をする。少年は先ほどまで食べていたクッキーのごみを手に持って、プラプラさせた。

「なかなかおいしいのに巡り合わなくてね。…一度だけ喫茶店のクッキーをもらったことがあるんだけど、あそこのが一番おいしかった」

それから、「コーヒーも飲んどけばよかったかな」と呟くように付け足した。

「だったらそこに、また買いに行けばいいじゃないですか」

きょとんとしながらもそう言ってきた若者と、彼が持っている大きなナイフを見て

「…その店には、もう行けないから」

少年はどこか懐かしそうに、そして寂しそうに、ほほ笑んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9930t/

殺され屋

2011年7月16日03時23分発行